

迎春



アグラ城よりヤムナー河 河畔のタージ・マハール廟を望む（本文中に関連記事があります）

目次 contents

- ・あけましておめでとうございます 2
- ・日米草の根交流サミット大会の参加から学ぶ 5
- ・崇仁のまちづくりと学校ビオトープづくりに
取り組んでいます 7
- ・失われゆく昭和の原風景 8
- ・赤穂市加里屋地区「御成道」が完成しました 10
- ・小松島港の社会実験～手作りフリーマーケットを開催・・ 11
- ・第4回「京滋奈三・広域交流圏シンポジウム」を
開催しました 11
- ・「自然と文化の森づくり」へ向けて 12
- ・インドで考えたこと 沈思黙考 13
- ・アルパックプラネット9号を発行 15
- ・まちかど 16

21世紀の拓き方

取締役会長 三輪 泰司

世界は大転換。アルパックも新世代へ変換が完成する年。組織は創立35周年。個人的には喜寿。組織は30周年から5年間かけて改革を進めました。人生のステップは10年とも20年ともいわれます。おかげをもって今年いくつかの職務が任期満了になります。ご指導、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

21世紀には二つの専門を持つ人がトレンドだそうです。確かに専門的な知識や技術を高め、磨くことは大事でしょう。特にハイテクと社会性のバランスある専門性が大事だと思いますが、どうもそればかりではないように思っています。昨年、国土庁から「大都市圏政策史」をおまとめになるということで、関西文化学術研究都市の構想と推進について、岡本道雄先生、霜田稔さん、河野卓男さんの元秘書・松岡さんとご一緒にお話をしました。結局それは、「人類の幸せな未来のため」という奥田東先生と河野さんの情熱に意気を感じて、まず多くの学者が、次いで経済人が、続いて政・官の方々が献身的に働き、成功に導いていただいたおかげだということだと思います。

21世紀を拓くのは、まず何のために、誰のためという目的があって、専門的な知恵と、もう一つは情熱に燃える奉仕の精神でしょう。アルパックの次世代に望むのも、この「二つ」の道です。

気分一新、若者に戻り発想を転換する

代表取締役社長 金井 萬造

21世紀、コンサルタント歴30年を越え、今までの経験を振り返り、ハングリーさとリフレッシュした新しい発想が大切であると痛感しています。自分を若がりさせたいと念じています。

最近、仕事を進める中で「こと」を起こすには「人材」が大切と思っています。しかし、地域づくりにおける「人材養成」は大変難しいと思います。考え方や環境の違う人をまず元気にさせ、活力を発揮して行動しこれを応援。よい環境と交流の場と出会いと助言を企画する。併せて個々人は自主自立精神を発揮して明確な主張をしていく。これらが積極的に交わり、交流から創造性を生み出していくことが大切だと思っています。

例えば、人を集める工夫については面白く参加したくなり、活躍したくなる出番を企画しプロデュースしていくことが大切だと思います。遊び感覚や自由参加でいて求心性を発揮する企画が重要となると考えています。

先日も大学の講義で経験したことですが、講義したい内容を受け入れてもらえる環境に近づくためには多くの面白い小話を持っておくことが大切であると実感しました。同様にプランの提案でも多くの実績行動の中からためされた多様な発想やイメージを活かしていくことが大切だと思います。

従来の発想から多様な実績と豊かな個人的経験から提案し素晴らしい地域づくりに貢献したいものです。

本年もどうぞよろしくお願い致します

「京都」に学びませんか

京都事務所長 山口 繁雄

ここ数年、年始のご挨拶は「時代の転換」をテーマにさせて頂いています。20世紀から21世紀への移行期ですから、時代の変わり目とすることができます。

しかし、その変化は、単に世紀が変わるからというものではなく、産業経済から生活文化に至るまでの大きな構造的変化を伴うものであるという意味で、まさに「時代の転換」だといえるかと思えます。

新時代には、新しい創造的な発想が求められます。かといって「無」から「有」を産み出すのは至難の技です。そこで、何かヒントを、ということになりますが、まさか、また「欧米」に学ぶというのではこれまでの路線を延長するに過ぎません。

新しい発想を産み出す土壌は、何かと考えると、それは「文化」だと思えます。豊かな文化的土壌がないと、確かな実りは期待できません。そのように考えてきますと、これからの関西は面白いのではないかと考えています。

特に京都は、面白い。伝統的なものは古臭いと思えるのではなく、それを創造のための土壌として捉えると、楽しくなってまいります。皆さん、一緒に京都の秘密を探りませんか。本年も所員一同頑張ります。よろしくお願い致します。



地域づくりは、智恵と情熱と社会的使命感

大阪事務所長 杉原 五郎

徳島県の小松島港では、明石海峡大橋の開通を契機に、和歌山とのフェリー航路が廃止され、5年ほど前に竣工したターミナルビルが遊休化しました。なんとかうまく活用して港に再び賑わいを取り戻すことができないか、そんな思いでまちづくりが始まりました。ワークショップには、市民、銀行マン、大学生、地元の飲食店主、行政、コンサルタントなど多彩なメンバーが参加して、衰退しつつある小松島の港を活性化するためにアイデアを出し合いました。今、フリーマーケットを企画して、それをバネに港の活性化のための仕組みづくりに必死に取り組んでいます。

京阪神圏も、産業中枢機能の流出や雇用の収縮など衰退の危機に直面しています。大阪城公園には、家族と仕事を無くしたホームレスの人々が数多く見られます。

厳しい現実を前に、これからの地域づくりには、「智恵」と「情熱」と「社会的使命感」が重要と痛感しています。できるかぎり多くの知識や情報を集め、時代を読みながら必至になって智恵を出すこと、現状を打開していこうとする情熱を持った元気な人の存在、ともに地域をよくしていこうとする社会的使命感の共有。この3つをキーワード(成功の方程式)として、21世紀の地域づくりと企業経営を進めていきたいと思えます。



新時代創造元年をめざして挑戦します

名古屋事務所長 尾関 利勝

21世紀元年はアルパック名古屋の20年目

とうとう21世紀。仏教徒であるにも関わらず新世紀を迎え、いつもとは少し違った気持ちになるのは私だけではないでしょう。

アルパック創設以来35年目、名古屋は今年で20年目、文字通り大転換の時に来ています。バブル以来の激動期を経て、先が見えないといわれた頃から、ようやく社会論調は落ち着きを見せ、方向性が見えてきました。今までの時代経験と価値観を超えたパラダイム転換が社会のあらゆる局面で、そして人間の生き方として希求されています。

創造運動型の本格的ベンチャー社会へ

改革は未完ながら国際関係、政治、行財政、産業・経済、教育、市民社会、家族関係と拡がっています。この状況は本格的ベンチャー社会、すなわち成長主義や大量情報に基づくヒロイズム型社会ではない、自立と連携が支える創造運動型社会の到来を感じさせます。

変革を支えるITの文化インフラ化

こうした運動が渦巻く状態は、18世紀江戸や幕末から明治初期の時代創造期を彷彿とさせます。18世紀の転換を支えた印刷文字文化に変わり、現代の転換を支えるインフラとしてITが文化に昇華する時代になるでしょう。

21世紀元年を改革元年として挑戦します

今しばらくは新時代の創造を志とし、その実践を心がけ、自ら変革することに挑戦していきたいと考えています。応援して下さい。

とんぼの目とありの足

東京事務所長 小林 佑造

これからは、多様な立場からの視点を持ち、広く遠くを見る目を持ち、かつ、非常に身近な、現実的な視点を堅持し、きめ細かな行動力を持つことが大切だと思います。

今後10年間の建設市場全体は下降傾向であるものの、投資は70兆 57兆に対し維持修繕分野は16兆 20兆へ上昇傾向にあるとのデータも出ています。

この頃特にどれが本当(?)のことなのか建設工事費の内訳がわかりにくく、疑問を感じる不安定な中で仕事をしてきましたが、建設関連のクライアントの建物を「直営工場」として携わることになりました。まずは各部門の施工者と材料問屋探しから始まり施行プロジェクトグループを編成しながら個々の内容と金額について詰めていきました。その段階で、設計内容の甘さや無駄・無知の部分を相手の知恵を借りながら調整することから始まり、調整や段取り、まさに金額の組み立てられ方の現実を目の当たりにすることができました。あちらを立てればこちらが立たずの複雑な感情になりながら相手の収支も考え何ともしんどい仕事になりましたがどうか市場(有って無いようなものですが)より2割減近くで完成させることができたと感じています。

とんぼの目とありの足がこんなに大変なことであるのかを知り、その必要性を身をもって体験し、求められる仕事はこのことではないかと実感した昨年でした。

本年もどうぞよろしくお願い致します

2001年を迎えて～最近気になっていること

九州事務所・(株)よかネット

代表取締役社長 山田 龍雄

昨年の仕事やできごとの中で、気になっていることをご紹介します、年頭のご挨拶とさせていただきます。

市町村温泉増殖時代

九州事務所でも佐賀県のある村で温泉計画を行っています、ここ数年間で民間、公営含めて温泉があちこちで建てられています。私は「40年代は“投げるボーリング時代”で90年代は“掘るボーリング時代か””といっていますが、いくらなんでも少し増えすぎの感があり、いずれは淘汰されていくのでしょうか。

新たな地域コミュニティづくりが必要

総合計画に係わっている市町村の住民や役場の方と話していると、地域のタイプが違うのですが、それぞれにコミュニティの維持に悩んでいる地区があるようです。農村に都市住民が入り込んでいるところでは、それぞれの生活スタイルの違いからお互いの不満があり、高齢化が進展している団地では区長のなり手がいなくて困っているなど……。

地域の中でも自立してやってきた地区あるいは大字という単位を、今後とも自立してやっていけるような仕組みや折り合いの付け方をどのようにしていけばよいのか、住民と行政とが一緒に知恵を出し合うことが求められているようです。

日米草の根交流サミット大会の参加から学ぶ

〔大阪事務所 / 金井 萬造〕

日米草の根交流サミット大会に参加

昨年7月下旬から8月上旬にかけて、シカゴ市と周辺中西部3州の地方都市で開催された(財)ジョン万次郎ホワイトフィールド記念第10回日米草の根交流サミット大会に参加した。夏休みの企画で「地域の未来と子ども」をテーマとしたこともあり、参加者の4分の1を小・中・高校、大学生が占めた。大会は分科会とホームスティが目玉事業で、事前に両国の参加者がいかに魅力ある交流内容にするか、募集要綱づくりから参加した。要綱どおりうまく運営できるかはどうかは参加者の知恵と協力が大切であり、大会が終わるまで緊張した。大会では企画内容が多様であるため、まとめをお願いする各パートのリーダー、リエ

ゾンの選定が最も重要である。まさに人とのパートナーシップと心配りが大切である。

分科会の運営と専門家の役割

今大会はそれぞれの開催地が抱える課題をテーマに、合計16分科会を行った。各分科会では両国民の文字どおり草の根レベルの交流と相互の文化を理解し、感動を共有することが基本である。私が参加した「起業家精神の発揮とビジネスのあり方」の分科会では、日米の背景や土壌の違いを早い段階で理解し合い、自ら何を学び、何を発揮するかが重要なポイントとなった。一方的に開催地側のプレゼンテーションを聞くのではなく、交流内容を深めるために日本側の専門家としてのコンサルタント、研究者、企業からの参加者が発

表や意見交換を行ったので状況説明や課題、内容の明確化を図る上で大きな役割を果たした。今後の相方向の交流に一石を投じたといえ、国民と専門家の協働は大切であると実感した。

「ホームステイ」と国民の視点での交流

ホームステイは国際草の根交流では大切な事業になっている。普通、2泊3日で週末に実施している。私のように語学力の壁のある者でも交流で多くの成果が期待できる。私はアメリカ人の家庭を訪問して、ライフスタイルのレベルで見ると日本も共通のテーマを考える時代になっていると実感した。例えば、「環境共生」では、ペットボトルを捨てようとする、これは「リサイクルよ」といわれるなど徹底していた。「健康ライフ」、「自然環境の大切さ」など原点に立つことの重要性を再認識した。また、生活の場を大切しつつ、コミュニティへの活動参加による社会貢献にも熱心であり、意見のあった仲間との交流を大切に、生活をエンジョイしていることは日本人も学ぶべきだと思った。さらに開催地のシカゴでは夕方、ホームビジットを実施し、両国の比較ができたことも大きな収穫となった。その他インディアナ州のリッチモンド市を訪問し、アメリカの建国以来の地方の歴史やハートランドの風土と文化を勉強する機会となった。

輸送トラブル発生と日米交渉

開催が夏期バカンスと重なっていたため、心配していた輸送（バス）トラブルが発生した。シカゴから地方都市に行くバスの到着が遅れ、地方企画の一部が実施できなくなった。大会実施費用削減が裏目に出ってしまった。そ

こで各リーダー、リエゾンが中心になって現場毎で臨機応変に対応したことが貴重な経験になった。今後は輸送関係は旅行会社にまかせることが再確認された。その後、費用面など事後処理のための日本側とアメリカ側の実行委員会の合同会議（日米交渉）に参加させてもらった。会議では今回の大会の取り組みを総括したスピーチをし、色々な方々と相談し多くのことを学んだ。予定していたデトロイト市のCDC（コミュニティデベロップメントカンパニー）の調査を取りやめての参加であったが、トラブル対応にはその機が大切であることを学んだ。

国際交流企画・運営の「様変わり」

急速に進む情報化の中で国際交流の企画・運営も大きく様変わりしてきている。ことに費用面と情報面でインターネットの活用が主役になってきている。参加者の募集や募集要綱づくりにあたっての資料収集などE-mailとホームページが大いに役に立った。このような動きの中で東京から全国の拠点都市のネットワーク型連携の企画・運営へとシフトしつつある。また、今後の展開との関係で大きい単位から小さい単位の多様な交流、大会の集中開催から地域の分散型開催への方向、多様で日常的交流へと展開が見通しがされつつある。併せてボランティア運営やインターンシップの教育・研究の場としての取り組みが考えられている。なお、今回得た経験は、11月に報告書としてまとめられている。

崇仁のまちづくりと学校ビオトープづくりに取り組んでいます

〔京都事務所 / 嶋崎 雅嘉〕



現在、京都市の崇仁小学校で、学校ビオトープづくりに向けて様々な取組が行われています。数年前から崇仁地区のまちづくり（アルパックニュースレター81・83・88号参照）をお手伝いしていますが、今回のビオトープづくりもお手伝いさせていただいていますので、ご紹介します。

崇仁小学校は、京都駅から300mという都心にある小学校ですが、鴨川に接し、少し足を延ばせば東山にもほど近い環境です。そして、最大の特徴として、小学校のグラウンドに高瀬川が流れているのです。高瀬川は鴨川の水を取水した運河で、古くは様々な物資を運んだ重要な川でした。崇仁小学校では、この高瀬川のある恵まれた環境を活かした学校ビオトープづくりに取り組むこととなったのです。

ビオトープづくりでは、これまでに、生き物クイズや、高瀬川の生き物調査とマップづくり、生き物に詳しい先生の講演会など、多くの取組を行い、児童のビオトープに対する認識を深めることに努めてきました。

子ども達が見つけた高瀬川の生き物は、意外なほど多様なものでした。まず驚いたのが、ナベブタムシが多く見つかったことです。ナベブタムシとはタイコウチなどと同じカメムシの仲間です。濁りのない酸素の多い水でしか生息できないとされている生き物で、高瀬川の水質が意外なほど良好なことがわかりました。その他には、ハグロトンボなどのヤゴ、カワニナ、エビ、アメンボ、トビゲラなど、多種多様な生き物を見ることができました。

子ども達は、これまで、高瀬川の生き物というと、ザリガニにしか関心がなかったの

ですが、あらためて高瀬川の中に多くの生き物がいることを発見し、高瀬川の懐の深さを感じたのではないのでしょうか。しかし、その高瀬川にも、大きな課題があります。

高瀬川は、都心部を流れ市民生活に非常に密着した水路です。生活と密着してきた歴史から、生活排水路としての側面も持ち続けてきたという事実があります。このため、生ごみ、空き缶など、多くのごみが流れてきており、この問題は、ビオトープの整備と併行してまち全体で考えるべき課題です。

学校ビオトープづくりの取組は、11月に行った6年生による設計図づくりのワークショップで出されたアイデアを中心に、今年度中に地域の大人達の意見も盛り込んだ基本計画をつくります。子ども達からは、大人が発想しないような視点や思わすうなずくようなアイデアがどんどん出されています。

一連の取組を通じて、子供達にはビオトープに対する認識や、生き物に対する興味、感動を感じてもらいたいと思います。また、まちづくりの一環としてもとらえられる高瀬川の整備に、子ども達が主体となって参加できることに、地域社会とのつながりや自分達もまちを構成する一員であることを感じてもらいたいと思っています。



ワークショップで出たいくつかのアイデア

失われゆく昭和の原風景・近代和風住宅の保存への想い

〔名古屋事務所 / 尾関 利勝〕

残しておきたい故郷・昭和の原風景

初秋にしては夏の暑さが残る九月のはじめ。日暮れにはまだ少し間のある名古屋主税町加藤邸の庭は、日差しが長い影を落としはじめて、ゆく夏を惜しむように生い茂る木々の葉陰が涼しげに揺らめいている。

今ではこの家の風物詩となった陶製の燭台をそこかしこ、草の影にしつらえ、満遍なく水打ちした庭石や苔がしっとりとし落ちてく庭には、かすかに香を漂よわせて、さりげなく客を迎えるこの家の仕草が心憎いばかり。

いつもながら心の和む時を感じる情景が、目前にひろがる。セピア色のスクリーンでも掛かれば、ここは昭和戦前の世界。ふと少年時代を過ごした生家を思い出す。この家ほどの格調は無かったが、子供には巨木に見えた庭の松、登っては落ちた庭石に灯籠、夏の仕事は朝の水打ち、苔を取ってはしかられた草むしり、三時には蝉の声を聴きながら腹這いになってスイカを食べ、夕暮れには線香花火を楽しんだ縁側、書院仕立ての座敷、鴨居に背伸びして蚊帳をつり、蚊取り線香の漂う中をまどろむ。今、私の記憶にある、戻ることのない原風景。この家には多くの人々が失った故郷・昭和の情景が今でもある。何時までも残しておきたいと思わずにはいられない。

庭と座敷を即席の劇場に仕立てる

今日は、この家を文化サロンとして活かそうとする加藤真理さん主宰の自習舎友の会手づくり企画、女優小島範子の「高瀬舟一人語りの会」。この家のファン、会の常連、一人語りに興味を持つ人、それぞれの思いを持ちながら三々五々、観客が集まってくる。

一瞬座敷の灯りが消え、溢れんばかりの観客のざわめきがすうっと静まると、薄暮れの庭から静かな尺八の音が、柔らかな風のようにゆったりと流れはじめた。ジャンルをクロスする仏僧矢野司空が尺八を奏でながら燭台の明かりの揺らめきの中を庭石づたいに静かに歩いてくる。縁側に上がって演台脇に着く。ひとしきり、もの悲しく高まる尺八の音が静まると、ようやく縁側に灯りがついた。そこは即席に仕立てられたこの日の舞台。背後の庭は刻々と明るさが変わりゆく自然のホリゾン、そして客席は二間続きの座敷。ほとんど同時に、いつの間にか演台に座していた黒紋付き姿の小島範子の一人語りが始まった。

熱く悲しく鷗外の心を伝えた一人語り

物語は森鷗外の原作で良く知られている。たしか中学の頃、布団に潜って読みあさったかすかな記憶が残っているが、あらずじはさほど正確には覚えていなかった。



庭を背景に縁側を舞台にした即席劇場



縁側の舞台と演者

NHKのラジオドラマやテレビで昔から知られる名古屋の俳優・天野有恒を師に天(おおぞら)の会ははじめ幾多の独り芝居で鍛えられた小島範子の確かな語りは、時は江戸、高瀬川を下る囚人舟を舞台にして、下町職人のつましいが不足を知らない平穏な暮らしぶりをリアルに伝え、日本舞踊で洗練された静かな動作や表情と時に情のこもった語り口は、主人公喜助がこれ以上はないと言うほど誠実に生きながらも、不条理とも言える兄弟の命の別れとその後の歯がゆいばかりに無念な顛末とを熱く悲しく語り綴っていく。

下町暮らしの貧しさの中にも足を知る生活の価値観と自ら死を選択する生命観とを問うこの物語の主題と展開、これをかみしめるかのような小島範子の静かだが熱い語りかけと、物語の展開に情を添える矢野司空の控えめだが張りの効いた尺八の音。通り抜ける風に開放された加藤邸の座敷と庭に、空気のように溶け合わされたこの日の劇的な時間と空間の展開は、まだ足を知ろうとはしない今の私にも、熱くさわやかな余韻を残した。

物語りの終演とともに座敷に灯りがつくと、突然、現実世界に戻った観客の拍手が鳴りやまない。座敷中に熱気がこもり、つい今しがたまでの熱演の余韻が続いている。

恒例の懇親の宴は夜中まで続く

余韻さめやらぬまま、早速、酒、肴が用意された隣の中座敷に会場を移して、恒例の懇親会が始まる。これが楽しみで会員になっている人もある。ほとんど帰ることなく残った観客と、直前まで熱演していた出演者とを交えて、まづは冷えた生ビールで乾杯。まだ暑さの残るこの季節にはビールが最適。瞬く間に売り切れる好評さ。真理さん心づくしの突き出し、東鮮本店特製の祭寿司と松前寿司を肴に、金虎酒造の吟醸本丸御殿で舌鼓。

今し方の余韻を確かめるように、あちこちで出演者を取り囲む会話はつきない。宴はいつもながら街が寝静まる深夜まで続く。加藤邸の秋を親しむ宴にふさわしい催しだった。

昭和の原風景・近代住宅建築保存に支援を

街道の町並みや公共建築、事務所建築と違い住宅街の保存は多くの場合、経済効果が見えにくく難しい。加えて個人所有故に相続が大きいのしかかる。文化の社会性と個人所有との狭間で残したいが残せない所有者の葛藤は喜助兄弟の命の葛藤にも似た近代の不条理と思えてならない。こうしている間にも昭和の原風景は人知れず姿を消していく。多くの方に支援を呼びかけたい。皆様のご意見を。

(写真はスペース井沢知旦氏提供)



演奏中の矢野司空



熱演中の小島範子

赤穂市加里屋地区「御成道」が完成しました

〔京都事務所 / 石井 努〕

これまでもニュースレターで何度かご紹介していますが、赤穂市加里屋地区の一連のまちづくりの仕事で、「御成道」の設計をお手伝いさせて頂き、昨年(2019年)の11月9日に行われた点灯式(完成式典)に出席させていただきました。

御成道の整備については、「加里屋地区まちづくり整備計画」のプロジェクトの一つとして位置づけられたもので、「忠臣蔵のふるさとまちづくり協議会」や、沿道住民の方とデザイン検討の段階から一緒につくりあげたものです。

この道は、藩主浅野家の菩提寺で、花岳寺と、赤穂城を結ぶ約300mの由緒ある道で、沿道には市の市街地景観重要建築物となっている町屋もあり、歴史的な雰囲気を感じさせます。

道路の幅員は約6m程度で、全面アスファルト舗装から、道路両側の自然石舗装、中央部の脱色アスファルト舗装へと衣替えすることにしました。照明は、自然石を素材とした足元灯と、電柱共架タイプの街路灯を設置しており、暖色系の光を放つ電球を用いているので、「やわらかい感じ」のする空間が創り出されています。また、沿道への「光害」の配慮として、器具より上方に電球の光が漏れにくい工夫を凝らしています。

点灯式は「忠臣蔵のふるさとまちづくり協議会」の主催で、商工会や青年会議所の方達も加わって、にぎやかに行われました。「点灯式」なので、もちろん暗くなってから始めることになるのですが、夕暮れ時からぼちぼち人が集まりだし、開会の時間には200人くらいの方が花岳寺の前に集まっていました。協議会の蔦野会長、北爪市長、議会議長のあい

さつに続いて照明が灯され、参加者全員で御成道の渡り初めをしました。その後、アトラクションとして青年会議所の方と地域住民の方を中心とした「デッション」という踊りが披露されました。当日はとても寒い日でしたが、会場(御成道)の熱気はものすごく、最後は、我々アルバックのメンバーも含め、会場に集まった人が参加して、「デッション」を踊りました。近頃は盆踊りすら踊る機会もない? 僕はというと、地元の方の勢いに圧倒されながら、手を振り足を振り、なんとかリズムをとるのがやっとでした。

加里屋地区では、御成道に続いて今後も街路整備や広場の整備などが予定されており、これからもソフト・ハードの両面において地域のまちづくりが進められていきます。一步一步着実に前進している加里屋地区の雰囲気を肌で感じてみませんか。そして、照明が灯る御成道のしっとりとした空間にも立ち寄って頂ければと思います。

最後に、設計にあたってたくさんの御意見を頂いた地元の方々、市役所の皆様、様々な面からサポート頂いた皆様に感謝申し上げます。



小松島港の社会実験

手作りフリーマーケットを開催しました

〔大阪事務所 / 竹野 潔〕

かつて和歌山市と徳島県小松島市を結ぶフェリーターミナルであった地区を活性化しようと、手作りのフリーマーケットを開催し、約6,000人（新聞発表）が来場した取り組み事例について報告します。

小松島港本港地区がある小松島市は、徳島市の南隣に位置し人口約4万人で、これまでは和歌山市と小松島市本港地区を結ぶフェリー航路がありました。しかし、平成11年4月に航路が徳島港区へ移転され、当市のフェリーターミナルビルが遊休化し、平成12年4月には、当ビルが船会社から市へ無償譲渡されてしまいました。

そこで昨年度から、運輸省、徳島県、小松島市協同で本港地区の活性化調査が進められ、(財)港湾空間高度化センターとアルパック及び徳島市内の(株)建設材料試験所が協力コンサルタントとして、市民参加型のワークショップの運営や、懇話会や調査委員会と検討・調整しながら整備方向をまとめてきました。

今年度は、イベント等を通じた社会実験の実施とターミナルビルの利用方向を検討しており、その一環としてフリーマーケットが10月29日(日)に開催されました。

今回設置されたフリーマーケット実行委員



旧フェリー用駐車場を活用したフリーマーケット
 写真右は旧フェリーターミナルビル

会では、開催直前までどのようなPR方法やイベントがよいのか、どうすれば多くの市民が来てくれるのかなど、多面的に議論がなされました。具体的なPR方法としては、市の広報や新聞の記事、テレビ、市内幼稚園を通じたチラシ配布、さらに当日には市の広報車も出動するなど、実行可能な手段はすべて用いられました。また、イベントでは、ストラックアウト(9つの的をボールで抜き落とすゲーム)や餅つきの実演販売、お楽しみ抽選会を実施し、お餅の販売やお楽しみ抽選会では長蛇の列ができるなど、フリーマーケットは多くの人で賑わいました。

また、フリーマーケットの出店参加者(約60店)に対するアンケート結果からは、この場所はフェリーターミナルの駐車場であったため、ゆったりと商品を並べることができるなど、フリーマーケット会場としては好都合という意見や、フリーマーケット等の発展のために、出店者自身が参加できる企画・連絡会の新たな設置に対する好意的な意見も数多く寄せられました。

以上のように、多くの市民が来場し、出店参加者からも「次回の開催にもぜひ参加したい」という声を聞き、関係者は大成功と評価しています。

第4回「京滋奈三・広域交流圏シンポジウム」を開催しました

〔京都事務所 / 山口 繁雄〕

「畿央の杜」のお披露目

「京滋奈三・広域交流圏」の形成を目指して関係行政機関(京都府、滋賀県、奈良県、三重県、京都市)と経済界(関係商工会議所、商工会連合会及び関係経済同友会)とで構成する研究会を始めて、早くも5年が経ちました。

この間、「広域交流圏ビジョン」の策定（平成11年3月）、「行動指針」の策定（平成12年3月）を行い、共同事業として取り組んできたシンポジウムも第4回目を迎えることとなりました。

今回のシンポジウムは、特別の意味がありました。一つは、「ビジョン」づくりから「行動指針」を策定し、いよいよ広域交流圏づくりに向けての行動を具体的に起こすきっかけとなるものであることでした。二つは、「京滋奈三・広域交流圏」に「通称」として命名した「畿央の杜」をお披露目することでした。今回テーマは「日本の新しいライフスタイルを考える～「畿央の杜」からの提案～」

今回のシンポジウムのテーマは、上記のようにライフスタイル論としました。これは、当圏域の基本目標である「日本の新文化創造エリアの形成」に向けて、「畿央の杜」から日本の新しいライフスタイルを提案していこうとしたものです。

今回のシンポジウムは、「畿央の杜」のような多自然居住地域を多く含む地域におけるライフスタイルのあり方やそれに基づく広域連携のあり方をさぐる、ということテーマとしました。

基調講演は、俳優の柳生博さん。「森と暮らす、森に学ぶ」と題して、自らの八ヶ岳の麓での生活帯体験やそれに至る生い立ちを交えて、実に味のある示唆に富んだお話をしてくれました。

その後のパネルディスカッションは、滋賀文化短期大学の織田直文教授をコーディネーターとし、ゲストパネリストの「もくもく手づくりファーム」社長の木村さんと、関係府県で活躍する地域起こしリーダー4名の方々によって討論を行なって頂きました。

討論では、「畿央の杜」は、文化蓄積もある魅力的な多自然居住地域であり、新しいライフスタイルを展開していくには格好の地であるという共通認識が語られるとともに、それぞれのパネリストの方々の各地域における地域起こしの活動やライフスタイルが生き生きと紹介されました。また、現状ではそれぞれの地域でばらばらに活動を展開しているが、「畿央の杜」づくりを契機に広域的な連携や交流活動を展開していこうという決意が語られ、約400名の会場の人々に力強いメッセージが送られました。

「自然と文化の森づくり」へ向けて

- メダカ・水辺・里芋・食文化・河畔林・まちのお宝・歴史・まちづくり・etc -

〔大阪事務所/原田 弘之〕

里芋のぬめりが何ともおいしい「のっぺい汁」を知ってますか？ 食材や味付け、呼び名は地域や家庭で異なりますが、里芋や人参などを好みの味付けで煮付けた料理で、全国に広く分布しています。

昨年の11月23日に尼崎市で、市民と市との協働により「自然と文化の森フォーラム」を開催しました。「のっぺい汁」はその時の参加者に振る舞われたものです。「のっぺい汁」に使われた里芋は、皮を剥いても手がかゆくならないと言われる地域伝来のもので、「農作業サポーター」と銘打ち、都市内の休耕田を活用して、市民が農家の指導のもと半年ほどかけ育ててきました。

尼崎市では、平成10年より市民公募による「自然と文化の森を楽しむ会」を設立し、市民と市との協働のもと、地域資源について考え、活かす取り組みを行ってきました。場所は、大阪梅田から電車で10分という交通至便な住



参加者に振る舞った「のっぺい汁と里芋ごはん」

宅系の市街地で、猪名川と藻川に囲まれ、貴重な河畔林や農地、歴史・文化資源が点在し、尼崎市の中では地域資源に恵まれたところです。これまで市の関連する部局とも連携し、約40名の会員で分担しながら、メダカの飼育ボランティアの活動、水路をはじめとする水辺のウォッチング、前記の農作業サポーター、河畔林のあり方について考える実践的なワークショップ、歴史・文化・住宅などの地域資源再発見のウォーキングなどを行ってきました。

「自然と文化の森フォーラム」はそうした活動をより多くの市民に、特に地域住民にPRし、活動のネットワークを広げていくために行ったものです。当日は150人以上の参加者があり、活動報告の他に、兵庫県立人と自然の博物館の服部先生による基調講演、大阪・平野の町づくりを考える会の川口氏から「平野・まちぐるみ博物館」の話題提供、地元で花づくりや河川愛護、郷土史などに取り組む団体からの活動報告などがあり、それを踏まえたパネル討論を行いました。

「自然と文化の森づくり」へ向けて、服部先生からは「環境林から文化林へ」、川口氏からは「おもしろい+いいかげん+人のフンドシ」といったメッセージをいただきました。これらの言葉も参考に、「のっぺい汁」のように、いろいろなものが雑多に入っている、里芋



自然と文化の森フォーラム・パネル討論

の「ぬめり」が他のものを包み込み、全体としてはおいしい、といったような展開をめざしたいと思います。でも「ぬめり」って一体何でしょうねえ？

インドで考えたこと 沈思黙考

〔大阪事務所/馬場 正哲〕

インド北部のデリー、アグラ、ジャイプールの三都を駆け抜けた。朝10時30分、関西国際空港を出発、バンコック経由でデリーに現地午後6時に到着。なま暖かい空港で、国花マリーゴールドのレイと国産だというマイクロバスに迎えられた。ガイドはV・S・サルマ氏で半月前、森総理一行の案内役の一員だったという。

国策の国産

このマイクロバスは、相当に国策の我流であり、日本のものと比べて一応のものは皆揃っているが、無骨で何かが足りない。また、運転席は車全体の1/3は占めていて、ガイド、運転士、補助員の3人が乗務する。我々お客は8人だが、あと3人くらい乗務することが出来そうである。

早速、レストランのカシミア料理の夕食と相成ったが、「インドは下痢に注意」の初戦の緊張の裏をかかれたように、いきなりトイレで届かない。近頃忘れていた日本人の劣等

感が蘇る。多分この国策の国産主義は、「モノ」のなんたるかを余り解さないようにも思った。

いきなりの沈思黙考

翌未明、インドの「新幹線」でアグラに向かう。デリーの駅は首都の中央駅だが、相当な人々が住み着いているらしい。スッポリ布にくるまって寝ている様子は、生きているのか死体なのかよく分からない。犬までもがコンコースの雑踏で「だらし」寝ている。薄暗がりの中、押し売り連呼の中を、逃げるように「新幹線」に乗り込む。この新幹線もマイクロバス似で、頑丈そうだが、座席が動かない、トイレが外から開けられる。しかし、飛行機並に車内食が出る。「下痢」におののきながら、搭乗員らしい大男が配ったオムレツをいただく。

外は朝が始まりだし、雑踏の市街地からすぐに広大な原野を、全員「後ろ向き」に真っ直ぐに走り出している。窓には黄色のフィルターのようなフィルムが張ってあるらしく、黄色の世界に青空を水平に仕分けて農地や林の緑と赤土が続く。駅集落でスピードが落ちると、人々の往来が見えてくる。熟視すると、皆線路に向かっていて。例の売り込みがかかるのかとうんざりするが、線路に向かってしゃがみ込んでいる人たちがいる。如何にも皆が並んで考え事をしているのか、宗教の「行」の風でもあり、沈思黙考の世界にある。驚いた。皆左手に水の入ったペットボトルを携え「朝のお勤め」の最中であった。

輪廻の思考が息づいて

ガイド本によると、インドには都市や施設以外で便所を必要としない。排泄は普通に神聖な行為であり、隠すモノでも観るモノでもない。しかし、大切な肥料とも思うが、自然に返すことが優先されている。牛の糞は燃料

になるらしく、高く積み上げられているが、日本の昔のように徹底した活用ではなく実におおらかな循環を感じた。

人と犬も牛も水牛も猿も熊も山羊もロバも皆同じに生活している。高速道路に牛の隊列が一緒にいたり、交通を平気で止める。人間というものがこんなに自然の付属物だったんだとつくづく考えさせられる。街では路上に人が寝ていたり死んでいたり、何でもありの魑魅魍魎で世間体を問わない。どうも貧しいことなどは忌み嫌う習慣が無いようで、来世は同じ境遇にある可能性もあり、現世に功德を施し来世に対処することが優先されるようである。ヒンズーの輪廻の信仰と言うより、形而上の根本の違いがあるように思った。

世界を感じる

インド人の顔立ちは、目鼻の整った、西洋人を黒くした印象があり、アジアよりヨーロッパを強く感じ、また一瞬アフリカをも感じる。女性は殆どサリーをまとい、どんな場所、境遇であれ引き締まった気品を感じる。勿論、中近東と東南アジアもかいま見られ、地続きの世界が実感される。

従って、猛威をもって押し寄せるものには抗しがたい。この北インドは征服と被征服の歴史に彩られ、この凄まじい興亡の交流が文化を結実しているように思う。その頂点がアグラのタージ・マハールでヒンズーの国に咲くイスラムの壮大な華である。

近代化への自信と実感

今インドは、経済に走っている。ITには相当の自信があり、国民に安定を感じた。インドには義務教育制度がないことを聞くと、インドでは法律をつくっても守らない、寧ろ経済が富み対外的に比べて教育の必要を国民が気づき制度をつくるのがインド流だとい

う。既に、大学への進学率は相当に高い。

経済の成長は、カーストの意識を弱めている。貧しい時代はカーストが強まるという。この広大な大陸を人間が人力と牛とで耕しているのかと思うが、適当に機械化も進んでいる。しかし、進んで効率化を進めてもいない。現に、トラックの乗務員は3人以上でバックミラー、サイドミラー役を果たす。とにかく人が多く、皆で仕事を分け合って生きている。

ジャイプールの少女

中世の城砦アンペールから始まるジャイプールは、人口 300万人程の山岳を背景とする大都市で、マハラジャの築いた中世の城壁都市のショッピングセンター「ピンクシティ」が観光の拠点となっている。

市内を歩いてみた。路上のポンプに戯れる我々を微笑み眺める少女がいた。他の子ども達は元気で金を無心するが、何故か少女は我々が珍しいのかついてくる。ビニール袋を肩に、使える紙を拾って歩いているらしい。余りの可愛らしさに一緒にポーズを取ってもらった。お礼にチップを手渡したが、笑顔とチップのポケットへの収まり方の素早さにギャップを感じた。

ことほど、インドは遅しい。ガイドに、インド人は日本人を好ましく思うが、政治はとて理解できないといわれた。21世紀に世界を睨むのはこの国に違いない。



アルバックプラネット 9号を発行

プラネット編集委員会



アルバックの技術情報交流誌「アルバックプラネット 9号」を発行いたしました。今号の特集テーマは「市民とまちづくり」です。掲載内容は、次のとおりです。

<アルバックセミナー>

なぜ、いま住民参加の時代か？ / (財)21世紀ひょうご創造協会総括理事福田丞志氏

<オリジナル小論>

- ・住民主権の洛中の自治に学ぶ
- ・京都における行政区別計画へのチャレンジ
- ・環境先進都市「自治生活環境圏都市」構想
- ・震災復興まちづくりの検証とこれからの市街地整備の課題
- ・地方都市における中心市街地再生に向けた挑戦
- ・市街地再開発事業から新たなまちづくり基盤を考える
- ・多様な人々と取組を結ぶ住環境整備のあり方
- ・都市・農村交流の新たな動き
- ・家庭系ごみ質の国際比較
- ・L R T実現の意味と推進力
- ・名古屋近代建築事情

問い合わせ先:大阪事務所企画推進部 中村孝子



様々な地区でそれぞれの思いを込めた ミレニアムのイルミネーションが

〔大阪事務所 / 中塚 一、原田 稔〕

アルパックでは、様々な地区や地域でまちづくりや村おこし、商店街の元気づくりをお手伝いしている関係で、昨年の12月は、20世紀最後のクリスマスということで、様々な地区でイルミネーションのお手伝いをさせていただきました。

まずは、大阪泉州の高石市での手づくり型イルミネーション。高石駅前西側商店街では、「高石でメリークリスマス～まちをイルミネーションで飾ろう!」をテーマとして、商店街及び駅前植栽のイルミネーションに加え、周辺住民からお借りしたクリスマスツリーの展示やファイナルイベント（高石楽市楽座：クリスマスをテーマとしたまちかどライブ、もちつき大会、ハムスターレース、マジックショー、ゲーム大会などなど。詳細は<http://www.mars.sphere.ne.jp/cozytown/rakuraku/>）が、商店街と地域住民の方々と共同で、地域型イベントとして行われました。

そして、兵庫県の上郡町では町制45周年記念を兼ねたミレニアムイルイベントとして風の公園・千種川の歩道橋・上郡駅前の3ヶ所



上郡町

でイルミネーションを1月8日まで行います。役場の方の手づくりの「円心くん&エイトちゃん」も花を添えています。

最後は、お手伝いしておりませんが、大阪事務所から見える大阪城公園のイルミネーション。総工事費は約3千万円とのこと。その巨大さと明るさに大阪城もびっくりしていました。

さて、様々な地区や地域で、様々なイルミネーションが20世紀の最後に行われましたが、21世紀になっても持続していく、参加した方々の熱い思いが込められた地域型イベントに育って欲しいものです。



高石商店街



大阪城公園のイルミネーションと大阪城

アルパック (株) 地域計画建築研究所

- ・ 本 社 URL:<http://www.arpak.co.jp>
- ・ 京 都 事 務 所 〒 600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町 82・大和銀行京都ビル 6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
- ・ 大 阪 事 務 所 〒 540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70・住友生命 OBP ブラザビル 15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
- ・ 名古屋事務所 〒 460-0008 名古屋市中区栄 3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル 13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
- ・ 東京事務所 〒 160-0011 東京都新宿区若葉 1-1・YT ビル 2F/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- ・ 九州事務所 (株)よかネット 〒 810-0001 福岡市中央区天神 1-15-35・ホンダハビエ 5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673